# Parsec による簡易インタプリタの実装と構文設計 (最終発表)

機械科学·航空宇宙学科 3 年 1w192224 田久健人 August 1, 2021

#### はじめに

中間発表の続きです...

今回は、パーサではなく評価寄りの話です

進捗→https://github.com/tkyawa/project\_research\_a

#### abstract

Haskell のパーサコンビネータの Parsec を用いた簡易なインタプリタの実装を通して、パーサコンビネータの雰囲気を学び、実際に構文の設計を行う.

#### 目次

- ① 関数実装に向けた下準備
  - ・おさらい
  - Return 文の実装
- ② 関数の実装
  - 関数型の検討案①
- ③ 再帰呼び出し実装の検討
  - 再帰呼び出し実装における問題点
  - 案②: スタックベースの環境
  - スタックベースのスコープの挙動
- 4 おまけ
- 5 感想, その他

## これから拡張していく文法

```
\mathsf{AST} \rightarrow
data Statement = Seq [Statement]
           | If Expr Statement Statement
           | While Expr Statement
             Assign String Expr
             Skip
data Expr = Var String
             Integer Integer
             Bool Bool
              (Op) Expr Expr
```

## されから拡張していく文法

#### (実際の構文 →)

### 関数実装に必要なもの

関数は式だが中身が文→値(式)を返す文が必要

0000000000

### Return 文の実装

文を、(形式上は)値を返すようにする (evalStatement の型を統一) →Null 型の実装を考える

return 以外の文は、Null を返すようにする

## Return による jump 機能の実装①

```
一般的な Return 文・・・jump の機能がある
例:C 言語の場合
hoge()
{
   int temp = 1;
   return temp;
   temp = 2;
}
```

### (補足)Return による jump 以外での同等の表現

#### Rust:

body の最後に式を書き、それが関数の返り値となる return で処理を中断して値返すことも可能 (jump)

OCaml(関数型言語一般):

そもそも全部 Expr

必ずしも return による jump 機能は必須ではない 今回は、命令型としてのシンプルさを求めているため return によ る jump を導入

## Return による jump 機能の実装②

値を返すのは return だけ  $\rightarrow$ Null の場合と値が得られた場合でパターンマッチ

→Maybe モナドの恩恵が受けられそう!

## Return による jump 機能の実装③

```
evalStatement env (Seq []) = return Nothing
evalStatement env (Seq (h:t))
 = do
  car <- evalStatement env h
  maybe(evalStatement env (Seq t))(return . Just)car
```

Nothing で評価続行、Just で評価停止 (→ なんか逆...)

○○○○○○○ Return 文の実装

関数実装に向けた下準備

```
>> x := 1; return x; x := 10
1
>> return x
1
```

Return 文の実装 まとめ

return 文の実装により、関数の返り値の指定が可能になった

#### **AST**

構文的には, 関数の宣言, 関数適用が必要

data Expr = ...

| Func String Statement

| Apply Expr Expr

今回は、どちらも Expr に組み込む

### 実際の構文

```
Func:
    func_name :== func(arg){body}
Apply:
    var :== func_name(param)
```

#### Parser

Func の Parser・・・愚直に実装できる Apply の Parser・・・愚直に実装すると...

演算子として見る、優先度高め →builldExpressionParser に組み 込む

### parseApply

```
専用の演算子,予約語を使わすに実装したい
parseExpr = buildExpressionParser
      [[postfix (parens parseExpr) Apply]
      ,[binary "^" Pow AssocRight]
      exprTerm
 where
   postfix args fun = Postfix (flip fun <$> args)
```

→ (引数)を後置演算子として使用する(微妙?)

#### Funcの評価

関数型のようなものを用意し、関数型を返す

evalExpr env (Func arg body) = return (関数型の値)

#### 案 1:

Closure 内の Env の入れ子でスコープを表現する

## 案①による Apply の評価①

バラして、入れて、中身を評価

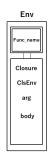
#### 手順:

- (1) func\_name を評価 → 関数なら Closure が返ってくる
- (2) もしClosure closureEnv arg body が返ってきたら...
  - (i)ClosureEnv に (arg param)をdefineVar
  - (ii)evalStatement closureEnv body

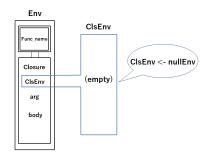
## 案①による Apply の評価②

```
evalExpr env (Apply funcname param) = do
    func <- evalExpr env funcname
    case func of
        Closure closureEnv arg body -> do
            value <- evalExpr env param
(i)
            newenv <- defineVar closureEnv arg value
(ii)
            result <- evalStatement closureEnv body
            maybe (return Null) return result
            -> error "Error in func"
```

#### 1. funcの宣言 func\_name := func(arg){body}

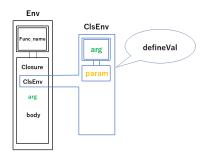


#### 1. funcの宣言 func\_name := func(arg){body}

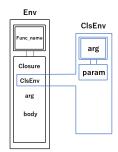


## 関数定義, 関数適用の際の環境の動き③

#### 2. Apply func\_name(param)



#### 3. evalStatement ClsEnv body



関数型の検討案①

## 案①の問題点

- 関数内から外側のスコープには一切アクセスできない
- スコープが関数宣言時に確定している

関数型の検討案①

#### まとめ

環境を入れ子構造にすることにより関数実行時のスコープを表現 したが、閉じた関数しか表現できないという問題点がある

#### 再帰呼び出しの構文

```
(すごい雑に表すと)
```

hoge :=  $func(x)\{x := x + 1; return hoge(x)\}$ 

### 現状の問題点

• 環境問題 (案①だとガチガチすぎ)

スコープを取る動作を,関数宣言時ではなく関数適用時にする必要がある

## (補足)未定義関数のApplyについて

評価の順番を考えると納得 func 宣言時, body は評価していない

再帰呼び出し実装における問題点

## 環境問題解決の方針

スコープを、ただの連想リストの入れ子で表現していた

→スタックっぽくする

## 環境問題の解決

内側に新しい空の環境を取っていた → もとの環境を参照する形にする.

evalExpr env (Func arg body) =
 return (Closure env arg body)

これにより、関数が開けたi

### 案②: 環境をスタック化する

新たな Env の定義:

type Env = IORef [Map String (IORef TypeEnv)]

Env を, Map の List で定義 List をスタックとして扱う 案②: スタックベースの環境

#### スタックにまつわるヘルパー関数:push

```
push :: Env -> String -> TypeEnv -> IO Env
push env var val = do
   valRef <- newIORef val
   cons <- readIORef env
   newIORef (Data.Map.fromList [(var, valRef)]:cons)</pre>
```

push は, List の先頭に新たな要素を追加

pop は, List の car を破棄

#### その他のヘルパー関数の変更

スタック (List) の頭から順に捜査していく

例:getVal の場合

```
getVal :: Env -> String -> IO TypeEnv
getVal envRef var = do
  envStack <- readIORef envRef
  case envStack of
    (h:t) \rightarrow do
      cdr <- newIORef t
      maybe (getVal cdr var) readIORef (lookup var h)
    [] -> return Null
```

データ捜査は List としての性質を用いる

#### スタックを使用した関数適用の挙動

#### 手順:

- (1) func name を評価 \$\to\$ 関数なら Closure が返ってくる
- (2) もしClosure closureEnv arg body が返ってきたら...
  - (i) ClosureEnv に, (arg param) を defineVar した 新たな実行コンテキストを push
  - (ii) evalStatement newEnv body
  - (iii) 使う終わった実行コンテキストは pop

案②: スタックベースの環境

### 案②による Apply の評価

スコープの挙動はスタックベース

案②: スタックベースの環境

$$(>> a := 100)$$

>> hoge := 
$$func(x){a := 5; return a}$$

a が定義される場所によるスコープの挙動の差

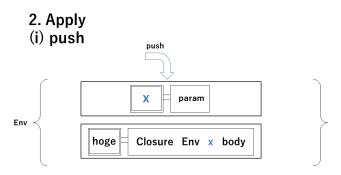
- (i) 引数の (識別子, 値) を, 実行コンテキストをとって push
- (iii) 使い終わった実行コンテキストを pop
- → (ii) の evalStatement だけが異なる、特に defineVal

https://github.com/tkyawa/project\_research\_a/blob/master/rec/Env.hs

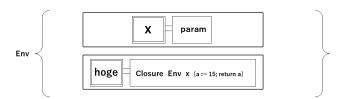
### スコープの挙動① local 変数の場合

#### 1. funcの宣言

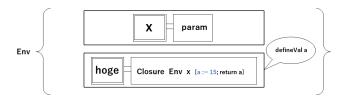
#### スコープの挙動① local 変数の場合



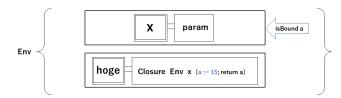
#### スコープの挙動① local 変数の場合



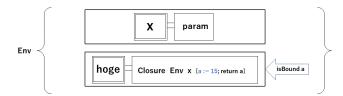
### スコープの挙動① local 変数の場合



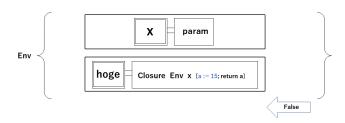
### スコープの挙動① local 変数の場合



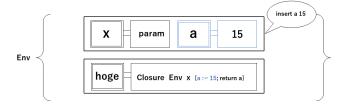
#### スコープの挙動① local 変数の場合



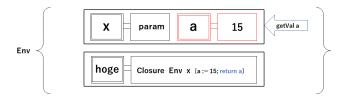
#### スコープの挙動① local 変数の場合



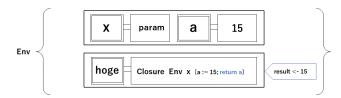
### スコープの挙動① local 変数の場合



### スコープの挙動① local 変数の場合

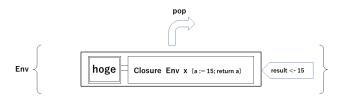


#### スコープの挙動① local 変数の場合



#### スコープの挙動① local 変数の場合

# 2. Apply (iii) pop

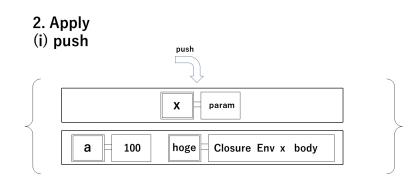


### スコープの挙動② global 変数の場合

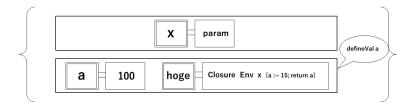
#### 1. funcの宣言

```
a 100 hoge Closure Env x body
```

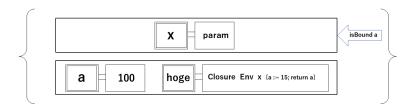
### スコープの挙動② global 変数の場合



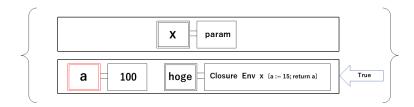
### スコープの挙動② global 変数の場合



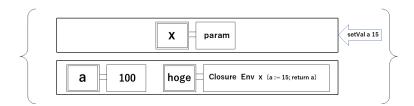
### スコープの挙動② global 変数の場合



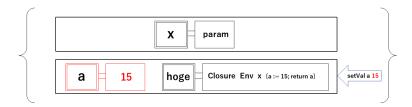
### スコープの挙動② global 変数の場合



### スコープの挙動② global 変数の場合



### スコープの挙動② global 変数の場合



まとめ

スタックベースのスコープの挙動

環境をスタックで実装したことにより、スコープの表現と柔軟性 が両立し、再帰呼び出しが行えるようになった

#### 更なる拡張を考える

- 多引数の関数
- 文法の整理
- List

#### 多引数の関数

カリー化で実現可能

例:add

add := func(x){return func(y){return x + y}}

#### 文法の整理

二項演算等をプリミティブな関数として用意すれば、Expr に無理 に組み込む必要がなくなる? もしくは zero, succ のみ用意して組んでいく?

#### List の実装

List 型, cons 演算子等をプリミティブに用意すれば,再帰呼び出 しが可能なので List 内の要素へのアクセスも可能

#### おまけのおまけ

関数が第一級オブジェクト→無名再帰ができる

感想. その他

### まとめ, 感想

実装を通して、言語設計における悩みどころが体感できた

- 何を式,何を文とするか
- 各シンボルの導入, 構文的な役割 (; や等)
- 関数実装周りのあれこれ (構文的な位置付け, return, 環境, etc...)

- [1] Thorsten Ball, 設樂 洋爾, Go 言語でつくるインタプリタ. オラ イリージャパン.2018年
- [2] Daniel P.Friedman, Matthias Felleisen, 元吉 文男, 横山 晶 一,Scheme 手習い, オーム社, 2010 年 [3]